G-16　（個人発表　6月13日(日)16:00～16:25　N323教室）

「国境を越えた民間医療」研究上の諸問題

南インド・Karnataka州Bijapurでのはり・きゅうボランティアの分析から

足立賢二（四国医療専門学校）

本発表の目的は、国際協力活動（保健・医療分野）における「民間医療」の実例を紹介し、今後の研究上の問題点を検討することにある。具体的には、南インドKarnataka 州Bijapur において2000年以降実施されてきたはり・きゅうを用いたボランティア活動を概観し、当該活動をどのような観点から把握できるか、受診者及び参加鍼灸師にとっての当該活動の意義は何かを検討して、「民間医療」の短期滞在型国際協力活動の一端を明確化する。

国際協力活動における保健・医療分野の担い手としては、国境なき医師団や日本赤十字社、国際保健協力市民の会（SHARE）、またAMDA などの民間ボランティア団体（PVO：Private Voluntary Organization）が著名である（国井、2005）。一方で、いわゆる「民間医療」を用いた国際協力活動では、はり・きゅうではメキシコやニカラグア（山本、2000）、ネパール（畑、2003）、またインドでの事例（Martley,2003・Bloomberg,2005）など、世界各地で多くの団体・個人の活発な実施例があるが、その実態はあまり知られていない印象を受ける。国際医療援助活動の担い手を目指し、はり師・きゅう師資格を取得した事例や（山本、2000）、被援助国の民間医療従事者に、西洋医療と共に東洋医学の研修を実施する事業に対して外務省NGO 事業補助金やJICA の草の根無償資金援助が用いられている事例（例えばAMDA、2003）を勘案すると、はり・きゅうなどいわゆる「民間医療」の国際協力活動は、現地の「民間医療」の検討と並ぶ重要な検討課題であり、その実像の理解は、保健医療分野での効果的な国際協力活動を探る上で貴重な知見を提供するものと考える。本発表は、このような問題意識から出発した。

本発表で対象とする南インドKarnataka州Bijapurにおけるはり・きゅうボランティアは、例年8月に実施されるもので、現在までに7回が実施され、1回の実施期間は各回10日～14日程度である。日本の伝統仏教（禅宗）で長年修行したインド出身の禅僧と、現地住民らで組織される仏教徒組織が主催者であり、彼らはその目的を「宗教・宗派、性別、カースト、財力の多寡を問わず、貧困によって満足な医療を受けることが出来ない現地の人々を対象に無料ではり・きゅう施術を実施すること」と説明する。この目的に共感した鍼灸師が毎回3～4名参加し、受診者は各回300～400名程度を数え、現地の報道機関においても大きく取り上げられてきた。第7回目の2009年には、初めての試みとして同州内3箇所の巡回施術が実施された。

これら一連の活動を概観すると、第一に、①長期住み込み型ではなく短期滞在型の活動であり、現地住民らに対するインパクトは限られること、②現地支援組織のいわゆる年中行事の一プログラムとして組み込まれていること、の2点のほか、③参加鍼灸師にとっては、オールタナティヴツーリズムに包含されるいわゆるボランティアツーリズム（中村ほか、2008）に該当する特徴を有すること、④幾人かの受診者の語りから、受診者にとっては当該活動が観光と一連のものとして把握されるいわゆるメディカルツーリズムに該当する可能性が高いこと、の2点を特徴として把握出来る。後二者からは、一連の活動を「観光」の観点から検討できることを指摘可能である。

第二に、大多数の受診者と現地スタッフの語りを検討すると、はり・きゅう施術は「インドにはない医療」という共通の語りのほか、「鍼灸は症状が軽快する技術である」、「JAPAN で実施されている技術だから、他のJAPAN のものと同じように“性能が良い”に違いない」の2点を要約できる。この点は、JAPAN に対する彼らのイメージが、はりきゅう施術自身と共に時には、治療効果に対しても大きく作用している可能性があることを示唆する。

第三に、参加鍼灸師の語りを検討すると、自らの施術の大部分を「近代医学的方法で実施した」または「非近代医学的な概念を用いることが出来なかったし、しなかった」と語っており、日本では「民間医療」の範疇に属する鍼灸師自体が、自らの施術行為を近代医療モデルによるものと把握している点を理解できる。

いずれにせよ、受診者は施術による単なる気持ち良さ（「リラクゼーション」ないし「癒し」）ではなく、「病気」に対する「処置」及び「治療」を求めて来訪していた。このことは、当該活動が参加鍼灸師にとって、「治療実践」を主眼とする「医療専門職」としての自己規定を意識する重要な場面となっており、通常日本において「医療専門職」としての自己規定を持ちにくい大多数の鍼灸師にとって、魅力的な参加動機となっている可能性を指摘できる。

【 国際協力活動、民間医療、はり・きゅう、南インド、改宗仏教徒 】